ない。テレビをみ終った時に、受け手が一人で、或は複数で、繰返し反復して考えるに足る番組の挑戦を受けるならば、受け手は垂直に受け入れたものを自已のうちで水平にひろげる作業を通して、機械との接触と人間との接触とを組み合わせてゆく。そうした思考をすることによって、受け手自身、マスコミによる疎外、洗脳、人間の画一化などをある程度くいとめることになるであろう。

要はマスコミがその課せられた社会的機能を十分に果たすことのできるよう、皆でマスコミの〃流れ〃を変えていかなければならないのだが、われわれ一人ひとりがその責任を負っていることを忘れてはならないのである。

（昭四七・一二・二〇）

（注）オルテガ著作集（白水社）「大衆の反逆」より

研究余滴　Ⅱ　＜俊成「五社百首『住吉切』」＞

世に「住吉切」と呼ばれる古筆切がある。俊成自筆の「五社百首」の断簡で、住吉社百首の分が残されていたところからの命名かと思われるが、実際には春日社百首の分も遺っていることは既にのべたことがある（和歌史研究会会報40号）。古筆切の集成が本文研究に資する点の大きいことから、折々目に触れたものを書きとめているが、次の一葉（十五行）もその一つである。現在までのところ、八葉（春日3・住吉5）を知ることができた。

槿　花

あさかほのつゆもやちよをへぬへきと
山ちのきくにうゑそへましを

駒　迎

あつまちやいく山こえしこまなれや
せきのいはかとなつまさるらん

月

あらさらんのちもこころやなほすまむ
みかさのやまの秋のよの月

擣　衣

のとなれる秋のあらしをさむしとや
ころもうつなりふかくさのさと

虫

わきてなほあはれなるかないその神
ふるきみやこのすずむしのこゑ

――「布留鏡」特別号、古筆了任著　大正一四年一〇月――

（松　野）